

北桐
HOKUTOH

2023

62



岩手大学教育学部同窓会

目 次

表紙絵 「そびえたつ木」

盛岡市立上田中学校 3年 横森 環

巻頭言

つながること、つないでゆくこと	教育学部長 境 野 直 樹…… 1
-----------------	-------------------

特 集 「令和」における教育の「不易」と「流行」

情報教育は「不易」ツールとしてのICT活用は「流行」	宮 川 洋 一…… 2
バーチャルな時代における体育科の強み（重要性）	長谷部 雅 彦…… 3
ICT利活用を位置付けた校内研究の在り方	平 澤 傑…… 4
GIGAスクール構想を失敗に終わらせてはならない	吉 田 孝 仁…… 5

桐の葉物語

人生を変えた出会いに感謝	横 沢 真知子…… 6
緑の中で、もがいた時間	北 條 優美子…… 7
「分からない」を解決するため	佐々木 寿 洋…… 8
教育実習とは「自己改革への道」	紺 野 好 弘…… 9

キャンパス便り

4年間の学び	宮 野 一 歌……10
大学時代を振り返って	早 坂 寛 希……10
出会いに感謝	馬 場 はるな……11
決 心	細 川 朋 成……11

思い出 ―退官される先生方から―

岩手大学での教員生活を振り返って	藪 敏 裕……12
学生さんに支えられ、教えられて	菊 池 悟……13
14年間の感謝	佐 藤 由紀男……14
語り尽くせぬ物語、出会えた皆様に感謝	鎌 田 安 久……15
日本・アジアから世界へ耳と目と心を開く ―私のミュージック・ヒストリー―	川 口 明 子……16

事務局だより

新会長就任／会務報告／連絡とお願い……………	17
令和3年度会計報告……………	18
令和4年度役員……………	19
編集後記……………	20

巻頭言



つながること、つないでゆくこと

教育学部長

境 野 直 樹

北桐会構成員のみなさまにおかれましてはご健勝のこととお慶び申し上げますーと書き始めてすぐ、ゼミを巣立った方々のことが脳裏をよぎりました。折に触れ連絡をくださり、お仕事のこと、ご家族のこと、時には吉報を、また時には奮闘の様子を拝聴するにつけ、教育の仕事に携わる我が身の幸福を思わずにはられません。そんなとき、話題はいきおい同期の仲間たちの消息へと転じます。「Aくんはどうしているだろう」「Bさんの活躍、新聞で読みました！」などなど。SNSの発達もあり、卒業後も近しくやりとりをしている仲間たちも増えて、同窓会のありかたにも多様な可能性を感じます。

平成28年度の学部改組に伴って、学校教育教員養成課程一本にその目的を絞り込んだ小・中学校、および特別支援の教員免許取得を卒業要件とした学部となってこのかた、以前に増して卒業生の教職への就職率について、毎年文科省からのきびしいチェックが入るようになりました。特に教員の大量退職期を迎えているここ数年、全国的に教員のなり手不足が深刻な問題となっており、教員養成大学・学部への期待は高まるいっぽうなのです。

申すまでもなく本学部学生はいつも優秀で、教員採用試験受験者の多くが合格し教壇で活躍しておられますが、一度のチャンスを惜しくも逃したことから教職に就く夢そのものを諦めてしまうケースが散見されることが残念でなりません。じじつ、臨時採用を経て翌年受験される多くの方が正規採用を果たしておられます。

そうかと思えば、3年次の主免実習で、ご自身の教員への適性に深い疑念を抱き、教職を諦めて民間企業から内定を得たものの、4年次に他校種の副免実習であらためて教職の魅力に開眼し、内定を辞退して臨時採用～翌年正規採用という「紆余曲折」を経て教員へ

の夢を実現する方もおられます。

さらに、卒業後大手民間企業の営業職で大活躍しているながら、再燃した教職への思いを断ちがたく、採用試験にチャレンジ、その後臨時採用を経て翌年度合格、正規採用され、前職で培った対人交渉能力を活かして学校現場ですばらしいお仕事をしておられる方も。ですから同窓生のみなさまも、いまいちど地域社会の教育のために尽力したいとお考えでしたらぜひ学部にもお声がけいただき、踏み出していただきたく存じます。「いや、いまさら学校の教員には…」というお声も聞こえてきそうですけれども、じつは教育学部での学びを活かしていただく場面は学校の教壇だけにとどまりません。

昨今、教員の「働き方改革」の一環として、部活動のアウトソーシングの試みが各地で活性化してきております。地域社会が学校現場とより緊密に連携するコミュニティスクールなどもその文脈でとらえることができますね（文部科学省のサイトで、「社会教育士」についてもご一読ください。）。地域社会がより積極的なかたちで学校現場を支えるー部活指導もその好例です。競技として「勝つこと」を至上の目標とする指導があるいっぽうで、学校の課外活動は本来また別の意義を持つはずで、学校教育における部活動が目指すのは、本来、心身の健全な育成です。教員免許を持つ教育学部卒業生のみなさまにこそ期待される場面かとも存じます。どうかより広い視点・お立場から地域の教育に、より一層のご理解とご貢献をお願い申し上げます。岩手大学は学部を越えたりカレント教育の企画を通じて同窓生の皆様の絆による社会貢献の可能性を積極的に追求し、ホームカミングデーの企画などにこれまで以上に注力してゆくことを方針決定し、今後積極的に展開して参ります。ご期待ください。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

「令和」における教育の「不易」と「流行」



情報教育は「不易」ツールとしてのICT活用は「流行」

岩手大学教育学部教授

宮 川 洋 一

「いわて学びの改革研究事業」は、いわて県民計画（2019～2028）第6章「新しい時代を切り拓くプロジェクト」の一つである「学び改革プロジェクト」－「いわて学びの改革研究・普及事業」を具現化するため、岩手県が岩手大学に委託した事業です。

本事業は、令和元年8月21日、岩手県教育委員会事務局教育企画室より岩手大学教育学部に対し、岩手県教育委員会、岩手県立大学、岩手大学の三者による共同研究事業として提案されました。附属学校園を有する本学教育学部としては、公立小・中・高等学校の研究協力校7校を含めた研究主幹機関としての役割を期待されたことから、大学本部とも本事業受託の可否について協議を行い、その結果として本事業を受託することにしました。その後、大学内責任部局を教育学部として、令和2年1月27日岩手県教育委員会より正式依頼を受け、本学教育学部教授会の了承を得て、令和2年4月から事業を開始したものです。

本事業の目的は、GIGAスクール構想が推進される中、豊かな創造性を備え持続可能な新しい社会 Society5.0の創り手となる児童生徒の育成を目指し、基礎的・基本的な知識および技能を確実に習得させつつ、ICTを活用した『主体的・対話的で深い学び』を実践・実証するものです。

本特集のテーマである『「令和」における教育の「不易」と「流行」』という観点から、本事業での取り組みをカテゴライズするのであれば、小学校「プログラミング教育」、中学校「技術・家庭科（技術分野）：内容D情報の技術」、高等学校における各学科に共通する教科「情報」という小・中・高一貫の情報技術・科学の学習（狭義の情報教育）は、「不易」に当たるものです。この情報教育は、学習者の情報活用能力の育成の基盤となる部分を担うものであり、もはや現代人にとって「読み・書き・そろばん」に続く位置づけと

なったものです。このようなことから国立大学協会では、令和7（2025）年度入学生を対象とする大学入学共通テストに『「情報」を加えた6教科8科目を課す』とし、本学も令和4年12月22日に令和7（2025）年度の入試者選抜における実施教科として、4学部とも「情報」を加える旨、予告したところです。

他方、各教科等の指導におけるICTの活用は「流行」です。ICTは、私たちがあることをなすときの強力なパートナーとして力を発揮してくれます。ワードプロセッサは人間の文章力を高め、高速インターネットと端末は人間の知識量を増大させるとともに、コミュニケーションのありようも激変させました。このようなICTを学校の授業に持ち込み、従来の学習の質を高めるとともに、効率化、個別最適化に資する「ツールとして活用すること」が求められているわけです。本事業においては、一人一台端末の導入直後ということもあり、まずは多くの事例を蓄え、有効活用法を還元することに力を注ぎました。今後、ICTは筆記具やノートと同様に文房具となっていくことが想定されます。その意味からして、現在のICTの活用は「流行」に当たるものです。なお、国が推進するICTの活用による学びの最終ステージは「教科の学びをつなぐ・社会課題等の解決・夢の実現」とされています。具体的にはICTを含む様々なツールを駆使して、各教科の学びをつなぎ探究する「STEAM教育（Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics等の各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育）」となっています。

今後、小・中・高という発達段階を踏まえ、基盤となる「読み・書き・そろばん・コンピュータ〔情報〕の教育」と「STEAM教育」のバランスをどのように取っていくのか、これらを適切にマッチングさせた教育実践とその効果の検証に係る研究が課題です。

バーチャルな時代における体育科の強み（重要性）

盛岡市立緑が丘小学校

長谷部 雅 彦

体育におけるICT利活用の利点としては、子供たちに気付きを促し、自分事の問題をもつことができるツールとなりうるということです。これまでは子供たちに自分事かつ切実感のある課題をもたせることに苦勞していましたが、それを助けてくれるものでもあります。ゲーム領域で例えると、自分たちのゲームの場面を共有することができます。「体育の見方・考え方」に通じますが、運動には「する」だけでなく「みる・支える・知る」といった多様なかわり方があります。ボール運動であれば、撮影者としてゲームを「みる」こと（思考）と、プレーヤーとしてゲームを「する」こと（試行）を往還する中で、常にチームにとって必要な情報とは何かを考えることになります。

そのような利点を踏まえながら、器械運動の領域の中で、跳び箱運動「首はね跳び」においてICT活用を試みた実践を紹介します。本単元では、撮影した映像が遅れて再生されるタイムシフトカメラ機能を利用し自分の姿を客観的に把握することにより、目指す姿と自分の出来具合を比較し、課題を明らかにすることをねらいとしました。

単元のはじめ、物珍しさからタイムシフトカメラの中の自分の姿を凝視する子供たち。その映像をもとに自分の課題に合った場で練習に取り組む様子に、私自身手応えを感じていました。しかし、単元が中盤にさしかかると、はじめにあれほど注視していたカメラに見向きもしなくなる子供が増えていきました。それよりも同じ場に集まった同士で声を掛け合う姿が見られます。「もうちょっと、手をグンと突き放したほうがいい」「跳び箱の上で『つ』の字になるように首で支えたほうがいい」「今のよかった！どんな感じで動いたの？」等々。「できる動きの感じ」を獲得した子供を中心に、技の教え合いが始まっていました。

また、単位時間のはじめに基礎感覚づくりで行って

いた壁倒立では、友達の補助をする子供が、前時と比べ友達の身体が軽くなるのを感じ「〇〇さんの身体が軽くなった！」と叫びました。また「おいしい。もうちょっと！」と声をかけます。そして、できるようになったときには、自分のことのように喜んで私に報告しにきました。もちろん、できるようになった子供も笑顔です。補助や教え合いを通して同じ技に向かい、お互いの頑張りをフィジカルで感じ合うことで、仲間の成功を自分のことのように喜ぶことのできる体育科の魅力を感じた瞬間でありました。

このことから、子供たちが運動する楽しみや喜びを味わうためには、ICTの利点を生かしながら、「する」経験だけではなく、「みる、支える」経験をフィジカルで感じ合いながら往還することが大切であると分かりました。また、効果的に学んでいる他者を見て、それをモデルとし、他者から言葉として説明を受けたり補助を受けたりすることで自ら学ぶ力をつけていく。その過程をフィジカルな体験から獲得していくことのできる実技教科の強みを改めて実感しました。

今後は、「ICTは必要か、不必要か」を教師が選択するのではなく、「ICT（タブレット）で何ができそうか」子供たちに問うことも必要だと感じています。子供が必要感をもってICTを利活用し、バーチャルとフィジカルを融合していくことで、より効果的な学びのツールとなると考えます。一方で、子供たちが運動する楽しみや喜びを味わうためには、「子供が何をしたいのか」「何に楽しみや喜びを見出すのか」を見とることのできる教師自身の目を磨いていくことが大切だと感じています。今後も日々の実践の中で努めていきたいと思います。

（平成16年 学校教育教員養成課程
小学校教育コース 卒業）



ICT利活用を位置付けた校内研究の在り方

岩手大学教育学部附属中学校 研究主任

平 澤 傑

岩手大学教育学部附属中学校に赴任して7年、研究主任として3年目となる今年度、第47回全国教育大会（鹿児島大会）にて、本校の教育研究を全国の関係者の方々へ発表させていただいた。発表した研究「新しい社会を生き抜く『人間の強み』を育む学びの追究」は、公益財団法人日本教育会が主催する令和2年度教育実践顕彰論文にて、最高賞である会長賞をいただいたものである。また今年度は、他県からの研究協力や視察の依頼も非常に多く受け、本校の校内研究が県外教育関係者から強い関心をもっていただいていることを実感した1年であった。本稿では、附属中学校の研究内容がどのようなものであったかについて簡単に紹介したい。

よく「ICTを位置付けた授業研究・校内研究」となると、授業を構築する段階でまず先に「どのようにICT活用を授業に位置付けるか」が頭に浮かぶのではないだろうか。また、ICTを用いた授業を参会者に見せるものの、「実践した結果、生徒の力がどう変わったのか」や、「なぜそのICT活用が生徒の力の変容につながるのか」という「教育と効果の因果関係」については一切触れられず、意図的にクローズアップされた生徒の良い記述や、予め成果と課題が決まっていたような予定調和の分析に終始することも少なくない。そのような「実践ありきの研究」や「生徒の成長が置き去りにされた研究」は、私自身が最も危惧していたものであり、改善を要するものであった。

そこで本校では、生徒に将来発揮してほしい人間固有の資質・能力「思考力・協調性・主体性」を定義付け・具体化および尺度化し、教職員集団で共有した。そのために必要な授業改善の視点については、「主体的・対話的で深い学びに関する危惧される3つの授業展開」として職員で共有し、学校公開時だけでなく、校内研等を通じ日常的に改善を図ってきた。ICT活用については、普段から授業で当たり前のように使い、学校公開においても、生徒が当たり前のように使っている状態を大切にしたい。ICTは資質・能力育成のため

の促進媒体（ICT活用自体には直接力を向上させる効果は無いとする）と位置付け、あくまで「活用の有無」ではなく「活用の仕方の質的向上」に拘り続け授業改善を図った。「ICTの効果的な活用」を授業に位置付ける際、図の段階を意識するよう共有し、活用レベルを上げた。本校第3学年では、総合的な学習の時間（ヒューマン・セミナー）において、盛岡の地域課題を見つけ解決策を地域に提言するという学びを行っている。今年度、長崎大学教育学部附属中学校とリモートミーティングソフトを用いた2対2のグループワークを行い、それぞれの生徒が考えた地域課題の解決策について改善点を出し合い、議論するという学習を行った。

資質・能力育成の効果	高い 中程度 低い 逆効果	生徒の学びの様子
		ICTを用いることでしか実現し得ない新たな学び
		ICTを用いることでより教科の見方・考え方が働き、生徒の主体的・対話的で深い学びを促す
		ICTを用いてアナログをデジタルに置き換える
		ICTを用いること自体が目的となり、資質・能力の育成に繋がらない・育成を妨げる

図

実践による教育効果の検証については、尺度を用いた量的検証と職員間での話し合いによる質的検証を複合させた。さらに心理尺度を組み込みながら、生徒の実態把握をより明確化し、教育効果の検討を行った。詳しい研究内容と検証結果については、本校ホームページにおける説明動画をご覧ください。（URL: <https://youtu.be/-2WMN4KjQI>）

今年度他県から注目いただいたのは、ICT活用自体よりも、「生徒の資質・能力向上をどのように教職員集団で図ったか」や「客観性のある生徒の変容分析の手法」であった。今後も本校では、手法よりも生徒の成長を大切にし、研究の在り方そのものに対して注目を集める校内研究を目指していきたいものである。

（平成21年 学校教育教員養成課程
中学校教育コース 卒業）



GIGA スクール構想を失敗に終わらせてはならない

奥州市立水沢小学校

吉 田 孝 仁

Appleのスティーブ・ジョブズは、自信をもって世に送り出したiPadを、「子どもの近くに置くことすらしない」と語っていた。Microsoftのビル・ゲイツは、子どもが14歳になるまで決してスマホを持たせなかったという。だから私は「1人1台」には懐疑的であった。

しかし、新型コロナの出現により、GIGAスクール構想は大きく加速した。授業におけるICT活用の可能性を探ってきた自分としては、加速した以上は是非とも成功させたい。しかし、今回の変化はあまりに大きい。大きすぎるのである。この高いハードルを、本当に岩手の教育界は乗り越えられるのか。そう感じる理由を以下に述べる。

① 下地が薄い。

ひと頃よりかなり改善したとはいえ、授業でのICT活用が十分に日常化しないまま、「1人1台」の時代に突入してしまった。まずは各教室に1台の大型提示装置の配置と、インターネットへの常時接続が実現し、先生方がそれらの有効性、利便性を十分に実感できていれば、次のステップに緩やかに進むことができたはずである。せめて今からでも大型提示装置の普及率100%を目指すなど、できることを積極的に進めないと、状況は厳しいままである。

② 教育界の「常識」が邪魔をする？

本県の「学校教育指導指針」の中に示されている内容の中に、「いわての授業づくり3つの視点」がある。「学習の見通し」「学習課題を解決するための学習活動」「学習の振り返り」という基本的な学習過程を通して、確かな学力を育成しようという取組であり、今日的な課題にも即したものである。しかしこの「3つの視点」を素直に読み解くとき、そこにICTの姿を見いだすにくいことも事実である。もし教師が「構造的な板書」に代表されるような従来型の授業観にこだわり続け、

「教える」スタイルを取り続ける選択をしたとき、タブレット端末を「文房具のように」扱いながら主体的に学ぶ児童・生徒が生まれるだろうか？高いハードルを乗り越えようとするならば、教育界の「常識」さえも一度は疑い、必要ならば打ち崩そうとする気概が必要である。

③ テクノロジーが十分な進化を遂げていない。

今回学校に導入された端末は、決して性能が高いとは言えない、1台5万円未満のモデルがほとんどである。タブレットとしての書き心地が今ひとつ、カメラの性能不足で教科書にあるQRコードが読めない、重くて持ち運びが困難・・・といった声も少なからず聞こえてくる。授業支援アプリによる意見交流も決して悪くはないが、授業での視認性を考えると、100円ショップに売っている200円のホワイトボードを「1人1台」整備するというアナログな手段の方が、少なくとも私にはしっくりと馴染む。この「アナログ感」が実現できない限り、一定以上の活用は進まないと考えるが、いかがだろうか（高価な端末なら実現可能である。念のため。）。

OECDの教育スキル局長であるアンドレアス・シュライヒャーは、「私たちが断片化した方法で学校にテクノロジーを導入し続けるかぎりテクノロジーの可能性を実感できない」と述べている。GIGAスクール構想は今回がゴールではなく、おそらく5年後にはネクストレベルがやってくる。それまで私たちは、まずは「あるもの」を有効に機能させようとする姿勢を示すとともに、今挙げてきた問題には真剣に対峙し続けなければならない。このコロナ禍で、オンライン学習やクラウド活用の可能性に光を感じた先生は少なくないはずである。岩手の教育界全体の意識が高まり、子どもの学びがより豊かになること切に願う。



人生を変えた出会いに感謝

横 沢 真知子

「真知子ちゃ〜ん！！！！」

大好きな親元を離れ、初めての一人暮らしに不安だった私は、教育学部の玄関で人目を憚らず大きな声で私の名前を呼び、こちらに手をぶんぶんと振っている彼女に助けられた。

小学校からバスケットボールを続けていた私は、大学でもバスケ部に入ろうと思っていた。入学早々、体育館に行ってみると、練習していたのはたった2人。これでは試合に出られない、私が入部しても3人か…と不安に思っていた。そこにもう一人、見学に来ていた一年生がいた。その子が、大きな声で私を呼ぶAだった。

Aと2人で入部し、マネージャーも選手になり、5人揃ったバスケ部は、栗林先生のもと、毎日練習を重ねた。部活が終わると、Aは私の家に帰ってきた。2人でたわいも無い会話で盛り上がった。大好きな先輩方、そしてAと過ごす時間はとても楽しく、一人暮らしの寂しさはもう感じなかった。

後輩も入部してくれるようになり、バスケ部の人数は少しずつ増えていった。時には朝から晩まで練習した。遠征にも出かけた。どんなに大変なことでも、今思い返すと、みんなの笑顔を思い出す。

4年生の時、県大会で優勝した。なかなか勝てなかった相手に勝つことができた時のあの喜びは今も忘れられない。チームの中では身長も小さくて何も取り柄がない私をつかい続けてくれた栗林先生には感謝しかない。バスケ部では「チームのために自分にできることは全力で取り組む」「支えてくれる周りの人に感謝の気持ちをもつ」ということを学んだ。

就職を機にAとは離れ離れになってしまったが、互いの結婚式に呼び合った。Aは私の結婚式で号泣しながら手紙を読んてくれた。今は2人とも子育てに忙し

く、なかなか会えないが、落ち着いたら2人でまた大学生活の思い出を語り合いたい。

私の人生を変えた出会いがもう一つ。研究室でお世話になった八巻恒雄先生との出会いだ。教員になりたいという夢をもって入学したわけではなかった私は、子どもが好きだからたくさん子どもと触れ合いたい、という理由で教育実践コースに進んだ。八巻先生の研究室の配属になり、八巻先生は様々な体験をさせてくださった。中でも、西和賀町立貝沢小学校に連れて行ってくださり、複式学級の子どもたちと触れ合ったことが一番の思い出だ。そこにいた子どもたちはキラキラとした眼差しで見学に来た私たちを見つめ、「どこから来たの?」「一緒に遊ぼう!」と声をかけてくれた。休み時間に一緒に遊んだ。帰ろうとすると、「もう帰るの? また会える?」と泣いていた。ほんの少しの時間を過ごただけなのに、泣いて別れを惜しんでくれる子どもたちに心を打たれた。帰りの車の中で、私は八巻先生に「岩手県で教員になりたい。」と伝えた。

八巻先生は自分が教員だった頃の話もよくしてくれた。6年生の担任だった時にトイレ掃除をクラスのみんなでしたことがあったそうだ。掃除が終わった時に床にどかと座った八巻先生に、「先生、汚いよ。」という子どもたちに「君たちが掃除をしてくれて、とっても綺麗な床だよ。」と答えたそうだ。その話を聞き、子どもたちが喜ぶ姿が目についた。そして、私も八巻先生のような、子どもと同じ目線にたち、子どもに寄り添える教員でありたいと思った。

八巻先生は令和3年9月に旅立った。今の八巻先生の教えは私の胸の中にある。私が教員として子どもたちに寄り添うことで恩送りをしたい。

(平成17年 学校教育教員養成課程
小学校教育コース 卒業)



緑の中で、もがいた時間

北 條 優美子

「特美」という言葉に親近感と不思議な一体感を覚える。美しい緑に囲まれた教育学部3号館。周辺には先輩方が残した彫刻作品や、現役生が扱う石や金属塊が、創作への情熱とプライドを内に秘めながら静かに佇んでいた。北側の絵画室から見える大樹の幹を、時折リスが駆けていく。私が所属する絵画研究室の古びたソファに深く沈み込むと、南側の木々の梢が光を遮り、足元にゆらゆらと影を落とした。

学部4年、大学院2年を3号館で過ごした。そこで得たものは現在の大きな礎となっている。

高校時代、恩師の影響で美術の道を志した。美術の授業や美術部の活動で、恩師の言葉一つ一つが当時の私の幼い世界観を貫き、同時に描きたい、創りたいという思いが湧き上がってきた。恩師と美術への憧れを胸に、大学へ進んだ。恩師の出身大学でもあった。

教育学部特別教科（美術・工芸）教員養成課程、いわゆる「特美」に入学。個性的な同級生や先輩方に出会い、ますます美術が楽しくなった。しかしその反面、それぞれ自分の世界観を持ち、その表現を極めようとする人々の中で、自分のやりたいことは何なのか、自分が求める表現とは何なのか、方向性が見えない自分に焦りを覚えた。核心がぼやけたまま課題に取り組み、中途半端なつまらない作品ばかり描いていた。「お前は何がしたいんだ？」高校時代の恩師の言葉がずっと脳裏に響く。

自分が表現したいものを作品として外に出すということは、非常に怖いことである。作品は自分そのもの。中身が丸見えになる。大学時代の恩師からは、課題の講評で難しい言葉をいただき、ますます煙に巻かれるような気持ちになった。ただ、「もっと好きにやればいい。」と言われ続け、その言葉を鵜呑みにして何の気なしに描いた絵が、意外と認められたりした。

大学院での課題の一つが、「個展をやること」。広い会場を自分の作品だけで埋め尽くす。それは自分でも見てみたい。しかし、同時に怖い。そんな思いを気負わず話せる友人や先輩がいた。特美で出会った友人は今でも大切な存在で、自分の支えとなっている。怖れを乗り越えていざ展示。搬出入の作業は実際、力仕事が多い。気が済むまでレイアウトを考えるので時間がかかる。体力も気力も必要な作業にとことん付き合っ、無償で手を貸してくれた友人。自分のわがままにこんなに付き合ってくれる存在がいるものなのかと感動した。ありがたかった。作品と向き合う孤独な時間を共有しつつ、どこかライバルとして高め合える存在。そんな友人達に出会えたのは、やはり「特美」であったからだと思っている。

美術の面白さにのめり込んで、それはだんだん「美術を教えたい」という気持ちになった。卒業後は教職の道を選んだ。高校か、中学校か、迷って後者を選んだ。恩師からは前者にせよと言われたこともあった。しかし、自分の意思で中学校を選んだ。教壇に立ち始めてもうすぐ20年になる。中学校で美術を教えながら子ども達と向き合う時、気が付くと「君はどうしたいの？」と声をかけている自分がいる。恩師の影響に自分でも笑ってしまうことがある。教えながら行き詰まることもよくある。雑務に追われる多忙な毎日。描く、つくる、感じる、その繊細で感覚的な部分が埃をかぶっていくような気持ち。それに抗うにはやはり自分でつくるしかないのだと改めて気づく。その時も脳裏に響いたのは「つくり続けるんだ」という恩師の言葉であった。正面から自分自身と向き合った特美での6年間は、今、私の血肉となっている。

（平成13年 特別教科教員養成課程（特設美術科）卒業）

（平成15年 大学院教育学研究科修士課程教科教育専攻 修了）



「分からない」を解決するため

佐々木 寿 洋

昭和60年4月、岩手大学教育学部小学校教員養成課程に入学し、下宿先は盛岡市館向町であった。それから40年近くになるが、現在の住居も盛岡市館向町であり、当時居住していた所は目と鼻の先である。

従って、毎日通る道、見る光景、日用品を買う店舗などは大学時代とほぼ同じである。様々な用務で教育学部棟の中に入ったり大学構内を通ったりすることもあるが、なつかしいというよりも大学生時代がそのまま続いていると思うこともある。

小学校教員養成課程は、専攻する科目等によって更に所属が分かれるが、私は高校時代までは多少「分かる」気がしていた科目が数学であったため数学科を選択した。しかしながら、その数学科では「分からない」という経験をしたことが一番の思い出である。講義を聞いても、書籍を読んでも、ノートを見返しても「分からない」ことばかりであった。ある問題を何とか仕上げ、できていると教授に言われても、自分ではできているかどうか「分からない」のである。しかし、「分からない」自分の周りにはたくさんの「分かる」仲間がいた。講義後やテスト前など、その仲間をつかまえては解説をしてもらい、何とか単位を獲得していた。毎日が「分からない」辛さとの格闘だったが、「分からない」お陰で「分かる」仲間と様々な交流ができたことはとても楽しかった。研究室では中嶋文雄教授の下、解析学を学ぼうと意気込んでいたが、ここでもまた「分からない」の繰り返しであった。卒業論文「数理生物学と分岐理論」の完成まで、何度も何度も研究室に通い、その度に優しく丁寧に教えていただいた中嶋先生には感謝してもしつくない。

4年次の教育実習では、盛岡市立仁王小学校第5学年平政光先生の学級に配属された。ここでは数学科とは別の「分からない」経験をした。どうしたらよい授

業ができるのか、授業者として回数を重ねても「分からない」日が続いた。研究授業はもちろん算数をすることにしたが、指導案作成段階から「分からない」まま授業に臨んだ。しかし、「分からない」私の周りには「分ろう」としてくれる子どもたちがいた。彼らは私がどんな発問をしても挙手して発言をし、授業の後には面白かったと言ってくれた。休み時間や給食時間も色々な話をしながら交流できたことはとても楽しかった。そして第5学年の平政光先生、小野國彦先生、仁昌寺真一先生には、小学校教員の心構えを教えていただき、この後の教員人生の大きな財産となっている。教育実習時に平先生に撮影していただいた写真の中の1枚を部屋に飾り、大学時代のリベンジをしたいとずっと願い続けていた。

それから十数年が経ち、担任教諭としての最後のクラスは、教育実習の際に配属された平先生の教室と同じ教室であった。願いが叶い、「分からない」を明らかにするためにここに戻ってくることができたのだと、よりよい授業を目指し懸命に取り組んだ。しかし、ゴールにはたどり着けないまま現在に至る。

岩手大学時代に経験した「分からない」を解決するために、研修会に参加したり、書籍を読んだり、直接話を聞いたり、様々な努力を続けてきた。「分からない」ことはこれらの他にもたくさんあり、年を追う立場が変わるたびに新たなものが生まれてきている。しかし、私の周りにはたくさんの仲間がいる。「分からない」ことをきっかけに知り合いになった方も多い。これからも「分からない」を解決するため、たくさんの人たちと交流し、楽しみながら「分かる」に迫っていきたい。

(平成元年 小学校教員養成課程 卒業)



教育実習とは「自己改革への道」

紺 野 好 弘

実習とは、教員を志望する若者にとって、自分が教師に向いているのかどうかを見極める最大の関門ではないか。ある調査によると教育実習を経て8割の学生は教員になろうという意思を固め、逆に3割の学生は教員への道を諦めるということだ。

わたしは、附属小学校で教育実習を行った。当時は実習期間が5週間、人数も1クラスに5～6名配属されていた。わたしは、なぜか実習生の中で1番最初に授業を行うことになった。授業が始まると、子どもたちは、積極的に手を挙げて発表していた。人生で初めての授業だったが、自分なりに何となく手ごたえを感じながら授業を終える事ができた。研究会になり、他の実習生から「落ち着いていた」「初めてとは思えなかった」等のコメントをもらい、やや有頂天になっていたところ、担当の先生は、とても硬い表情で次のように話された。「今日の授業は、本時の目標を半分も達成しておらず、とても残念でした」。私は、頭を「ごつん」と殴られたような衝撃を覚えた。その後、何がダメだったのかを詳しく助言されたと思うが、何を言われたのかよく覚えていない。ただぼんやりと先生の話聞いていた。最後に先生から次のような話があった。「今日の授業は、子どもたちにとって一生に一度きりです。私がやっても、あなたがやっても一回、実習生がやってもベテランの教員がやっても一回きりです。やり直しはできません。だからもっと教材研究をしっかりと行い、ベストを尽くしてほしいと思い、あえて厳しい言い方をしました」。目が覚めた思いがした。実習生と現場の先生では、授業に対する考え方が天と地ほど違うのだ、そもそも授業に向かう覚悟が違っているのだと痛感した。子どもに確かな力を付けるのが本当の授業なのだと分かった。単に「子どもが手を挙げて発表し、活発だったから良かった」というような自己満

足で済むものではなかったのだ。授業についての考え方の違いを思い知らされた実習のスタートだった。

教員になって何年か勤務した後、教育実習校に異動となったが、教育実習はエンドレスだった。特に実習が終盤に近づくと、終わるのが午前0時や午前1時になるのはざらで、疲労もピークに達し、実習録が途中でミミズが這ったような文字になったり、授業参観中、立って寝ていたりする実習生もいた。それでも、誰一人、途中で挫折することなく実習をやり終えていた。

実習には、教員志望もいれば、そうでない人も来る。当然のことながら、実習に向かうモチベーションはそれぞれ違っている。しかし、教員を志望していないからといって手を抜くことはできない。子どもにとっては、目の前に立っている先生が、将来、教師になろうがなるまいが、まったく関係のないことであり、教壇に立っている大人は、全て先生だ。まさに「今日の授業は、誰がやっても一生に一度きり」なのだ。だから実習中は、どの実習生にも「子どもの目線で考え教師として振る舞う」ことを話した。教育実習とは「自己改革」への道である。つまりそれぞれが実習期間、教師になり、どこまで自分を変えていけるのかについて、本気になって挑戦する期間だ。本気になれば人間は変わる。目のかがやきや声の大きさが変わると、思いが子どもにも伝わるようになる。当然、授業も上達してくる。まさに「先生が変われば授業が変わる。授業が変われば子どもが変わる」ことになる。そして自己改革が実現できた学生は必ず教職を志望するようになる。今でも、当時の実習生と出会うことがある。教員になって一生けん命授業に励む姿を見ると頼もしくなる。さらなる努力を重ね、次の時代を託していける教員に成長するよう願わずにはいられない。

(昭和60年 小学校教員養成課程 卒業)

4年間の学び

宮 野 一 歌

(学校教育教員養成課程 小学校教育コース
英語サブコース 4年)

4年間の大学生活が終わろうとしている。教員になることを志し入学した4年前。その頃はまだ何もわからなかったが、4年間の学びを通して教育観が徐々に明確になった。

大学2年生の時は休校やオンライン授業など制限が多くあった。人になかなか会えない期間を経験したからこそ、その後の人との出会いや様々な経験に対して有難さを感じることができたのだと思う。

私は特に教育実習と高校での学習支援に思い入れがある。

教育実習は小学校、中学校、特別支援学校の3つの校種に行った。授業づくり、生徒との関わり方など楽

しさを感じると同時に難しさもあった。一生懸命授業を考えたとしても、児童生徒の実態に合っていないことやその場に応じた柔軟な対応ができないことがあり、失敗もあった。しかし、その失敗があったからこそ、次は良くしようと悩み、先生や他の実習生と考え成長できた。真剣に取り組んだからこそ失敗が学びにつながったと思う。

高校での学習支援では、学校になかなか行けない生徒に勉強を教えた。そこではたくさん生徒とコミュニケーションを取ることで、悩みを打ち明けてくれることもあった。その時間が終わると「話を聞いてくれて嬉しかったです」という言葉をもらった。親身になり、共感的に話を聞くことの大切さを学んだ貴重な経験だった。

4年間で多くの方々に支えていただいた。お世話になった先生方、友人、実習などで出会った子どもたちに深く感謝をしている。教師になっても常に学び続け、子どもに寄り添いながら共に楽しめる教師でありたい。

大学時代を振り返って

早 坂 寛 希

(学校教育教員養成課程 小学校教育コース
社会サブコース 4年)

大学進学にあたり、地元宮城県から岩手県に引っ越した。初めての1人暮らしや大学の授業など多くの不安を抱えていたことを記憶している。また入学時、教員志望ではなかったため、将来の見通しを持っていないままの大学生活のスタートだった。それが今では、卒業後、地元宮城県に戻り、小学校の教師として学校で働くことが決まっている。

何が私をそうさせたか。それは数多くの出会いである。私たちの代の大学生活は4年間のうち3年間が新型コロナウイルスの影響で様々な活動が制限された。その中で数少ない経験の機会を逃さないよう、一つ一つの出会いから得られたものを考えるようになった。

大学生活での出会いはたくさんあった。そのすべての出会いが今の私を形作っている。特に2点を挙げる。

同級生とは授業や実習、教員採用試験の中で切磋琢磨し励まし合いながら共に成長できた。考えを聞く中で、私自身の考えは大きく広がった。さまざまなことを一緒に乗り越えたことで、決して1人では到達できなかった充実感を味わうことができた。

教育実習や学童保育でのアルバイトでは、子どもたちとたくさんのお出会いがあり、かけがえのない経験となった。これらの経験を通じて一人一人と向き合うことで、想いや願いを知り、子どもたちの自己実現につながることを大切さを学び、同時に子どもたちのために働きたいと思うようになった。この経験が、私が教員を志す後押しをしてくれたように思う。

来年度からは教師として学校で働くことになる。大変なことも数多く待っているだろう。これまでの出会いとこれからの出会いを大切にして、子どもたちとともに成長できる教師になるために努力し続けられる人間でありたい。

出会いに感謝

馬 場 はるな

(学校教育教員養成課程 小学校教育コース
教育学サブコース 4年)

この大学生活は、出会いに恵まれた4年間でした。

教育実習での子どもたちとの出会い。私は、子どもたちのきらきらと輝く瞳から、子どもには無限の可能性があるということを学びました。教師は、分かったことやできたことを一緒に喜ぶことができる、感動にあふれた職業だと実感しました。これらは、実際に関わってみなければ分からなかったことだと思います。コロナ禍の中、私たち教育実習生を受け入れていただいたことや、毎日かけがえのないことを教えていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

ボランティアでの出会い。私は、4年生から、岩手県立図書館の図書修繕のボランティアに参加していま

す。学生で参加しているのは私一人で、職員の方や他のボランティアの方に教えていただきながら活動しています。表紙やページの破れ、のど割れ等の修繕方法を学んだことはもちろんですが、お話していて心が潤うような「こんな大人になりたい」と思う方々と一緒に活動できていることに、大きな喜びを感じています。また、市内の学校に図書ボランティアに行っている方から「休み時間に読み聞かせを行ってもなかなか子どもが集まらない」というお話を聞き、子どもと本をつなぐ教師になりたいと思うようになりました。

先生との出会い。私は、室井麗子先生のご指導のもと、卒業論文に取り組んでいます。先生は、私の小さな興味に気付き、質問を繰り返しながら研究の方向性を引き出してくださいました。私も、子どもの話をよく聞き、一緒に考える教師になりたいです。

春からは、子どもをよく見て、よく聞いて、ともに学ぶ教師として励みます。そして、子どもたちの姿から、学び続ける教師になりたいです。

決 心

細 川 朋 成

(学校教育教員養成課程 理数教育コース
数学サブコース 4年)

趣味も特技も多くはない私であるが、そんな私でも今振り返ると大学4年間で多くの友人と過ごした日々は、授業、サークル、アルバイトと濃密でとても短い4年間であった。そんな怒涛のように過ごした大学生活も一つの節目として終えようとしている。

私は教師になると決心したのが遅く、大学3年の中学校主免実習を終えてからだった。それまでは「父が教師であるからなんとなく目指してみよう」と軽はずみな気持で生活をしており、自分の将来について模索し考える日々であった。そんな中での3週間の主免実習は刺激的で学びを得ることができた。

実習は決して楽なものではなく、教師という職の難しさを経験し、辛いと思う日もあった。しかし子供にとって何が楽しく良い授業なのかを考え、他実習生と共に教材研究を重ね、失敗と挑戦を繰り返していくうちに授業をする楽しさを感じるようになった。どんな発問をするとよいか、この授業は子供にとってどんな発見になり、どんな学びになるのかを考え、子供の成長を見守るといった教師という職に魅力を感じ、私は実習終了後に教師になると決心した。

「言った言葉には責任を持つ」授業はもちろんそれ以外の場でも教師として当たり前なことではあるが、当たり前だからこそ難しい。だが無責任なことを言う教師は子供の目からどのように見えるだろうか。これから私は教育現場で子供たちの支えとなり、一人一人の成長を見守っていくことになる。私自身も共に成長していき、自分が得た学びが今度は子供たちに引き継がれ、教育者として責任をもって導けるよう、日々精進していきたいと思う。

岩手大学での教員生活を振り返って

国語教育科

藪 敏 裕

平成4年3月に横浜の借家を引き払い岩手に赴任した。赴任する前、恩師から留学しなければ研究者としては厳しいといわれていたので、在外研究員にエントリーはしたものの、自分の順番まで20年以上かかると言われ外国には縁が無いと思っていた。

平成7年8月に当時の石川桂司学部長から、10月に中国山東省曲阜に行くので同行するようと言われた。なぜ私が行くのでしょうかと質問すると、君は中国が専門だからとのこと。10月23日に北京空港に降り立った。その後毎年行くようになるとは夢にも思わなかった。当時は新幹線も高速道路もなく、その晩は北京に泊まり翌日の飛行機で山東省の済南空港にむけ出発、夕刻に到着した。そこからさらに曲阜師範大学手配の車で5時間ほど走り着いた頃は深夜であった。途中の山東の農村に、なぜか懐かしい気がした。翌日曲阜師範大学内を視察した後、曲阜師範大学の学長等と協議を行い交流が開始した。

帰国して、学生交流を具体的にどうするか検討を始めたが、当時は学部国際交流委員会もなくましてや国際課も無かった。検討する過程で留学すると卒業が1年延びるという点が課題となった。留学は原則的に休学してやるものと漠然と思っていた。が、授業料免除協定による交換留学という制度があるという。学生が所属大学に授業料を払い在籍したまま留学し、留学先大学で取得した単位については帰国後手続きを経て所属大学の単位に振り替える制度である。この制度により学生は4年で大学を卒業できる。当時は日本国際交流協会がこの交換留学に奨学金を支援しており、この制度は留学の促進に大変有意義であった。その後、この制度により現在までに教育学部の学生だけでも30名以上が様々な大学に交換留学を行っている。そしてそれに倍する海外からの交換留学生が教育学部で学んでいる。

一方、研究については曲阜が孔子の生まれ故郷ということもあり、魯国史や儒教の研究者と交流を進めることができるようになった。『論語』や『史記』に記載がある現地ということもあり、裨益するところは多かった。儒教研究について、当時日本では津田左右吉など文献の記述に対して疑古的な立場が有力であったが、現地では信古的な立場の研究者が多く疑古的研究に一定の修正が必要であることを感じた。JRお茶の水駅のホームから北東方向を眺めると、木々の間から瓦屋根戴く建物を望むことができる。史跡湯島聖堂、かつては昌平坂学問所に付設されていた孔子廟である。この学問所の命名の由来となった曲阜市南東郊外にある昌平郷は、孔子の生誕地とされている。曲阜では昌平は孔子生存当時からの地名ではないという意見が主流であった。一方、昌平郷の考古学的な調査からは殷代からの遺物が確認されるということで、孔子の先祖が殷に所縁があるのではないかという点については、ほぼ全員が事実として承認していた。フィールドワークの重要性をあらためて痛感した。1990年代にはいると中国では儒教批判は急速に影を潜め、1996年には江沢民総書記の肝いりで曲阜に孔子研究院が設立されて、儒教研究も復権しつつある時代であった。曲阜師範大学歴史系の楊朝明氏や陳東氏は現在に至るまで交流が継続している。

今思えば、石川先生の曲阜行きのお誘いは、私のこの30年にわたる教育学部の国際交流にとっても私の研究にとっても決定的な意味を持っていた。石川先生に対しこの点をお話しできなかったことが悔やまれる。最近はコロナの影響で日中の交流も途絶えがちである。しかし私としては教育学部の中国との交流の扉を開いてくれた曲阜、日本文化にも多大な影響を与え、『論語』や孔子・孟子の故郷である曲阜との交流が今後も続けられてゆくことを心から願ってやまない。



学生さんに支えられ、教えられて

国語教育科

菊池 悟

私が教育学部に来たのは実質的に昭和最後の1988年、前任校もあわせると38年にわたって盛岡で教員生活を送ったことになります。本来は人前で話をするのが苦手で「教師にだけはなりたくない」と思っていた私が、こんなに長く続けて来られたのも、我慢して授業に付き合ってくれた学生の皆さんのおかげだと感謝しております。

そんな中でも、学生の皆さんの言葉に教えられたことがいくつかありました。

たとえば、たしか社会人入学の学生さんの言葉だったと思いますが、「いつ始まったかわからない授業もある」を聞いてからは、授業開始時には必ず挨拶をするようになって今も続けています。せめて授業が始まったことぐらいは何とか伝えられたのではないかと自負しております。

また、「教育実習で先生の授業が役に立ちました」と言ってくれた学生もいました。小学校での実習で、児童から「五十音」について質問され、私が講義で触れた「いろはと五十音」のことを思い出してくれ、とりあえず児童には「考えてごらん」と言って、帰宅後ノートを見直して翌日答えたそうです。授業が役に立ったと直接言ってもらえる機会はあまりありませんので、今でも記憶に残っております。

そして、最も印象深いのは、あの2011年3月の一連の出来事です。

毎年その時期は、日本語教育実習の実習生とともに北京の清華大学に出張しておりました。同年も12名の学生とともに、3月9日に仙台空港を発ち、上海経由で北京に到着しました。翌10日は長旅の休息と両替・買い出し等の時間に当て、11日の午後に最初の教壇実習がありました。現地時間13時30分（日本時間14時30分）に授業が始まり、前半の45分が終わり5分間の休憩に入ったとき、携帯電話の電源を入れると、あの大地震の情報が入ってきました。もちろん授業をしていた実習生は携帯電話を確認する余裕もなく、そんな情

報をつゆ知らずのまま授業を再開しました。授業の最後に受講の清華大生から「日本で大きな地震があったのですが…」と質問されても、よくわからずに笑顔で答えていました。

授業が終わった後、授業担当者も情報を知り、一同沈鬱な気分で宿に戻りました。夕食に行く元気も無く、有志が買ってきた牛丼で済ませました。みな、家に連絡がつかないと心配しているようで、とても実習を続けられる雰囲気ではありませんでした。

一夜明けると、実習生はみな家族と連絡が取れ、少し落ち着いてきました。実習を中止するにしても仙台空港は戻れる状態ではなく、すぐに帰れる見込みはありません。全員で食事に出かけ、たわいない話で気を紛らわしました。

その夜、私の部屋に学生の代表が訪ねてきました。彼女らの口から聞いたのは意外な言葉でした。「みんなで話し合ったんですが、せっかく来たんだから最後まで実習をやりたいです。」20歳そこそこの若者がなんと前向きなことだろうと感嘆し、さっそく清華大学の先生方に連絡を取り、予定通りの実習続行をお願いいたしました。

そして翌週、実習生たちはチームワークも素晴らしく、実習に取り組みました。期間も残りわずかになったとき、再び代表が来室しました。「家族からも今は中国にいた方がいいと言われたので、落ち着くまで残りたいです。」と、またもや意外な言葉でした。ビザの関係などから、さすがに却下しましたが、その立ち直りぶりにも舌を巻きました。

また、家族と連絡がなかなか取れなかった私を、人付き合いが不得手な実習生が心配してくれたことも有難いことでした。自分の学生時代と引き比べて、なんと立派な若者たちだろうと感心するばかりでした。

三十数年にわたって学生さんたちから教えられたことを今後の糧としたいと思っております。



14年間の感謝

社会科教育科

佐藤 由紀男

現在は廃止された生涯教育課程の教員として14年前に採用され、日本語・地域文化コースの地域文化分野で考古学と博物館学を担当してきました。考古学も博物館学も岩手大学では初めての専任教員の採用です。公募要領を見れば、教育委員会や博物館の考古学・埋蔵文化財分野の専門職員養成のための教員採用人事であることは明確でした。埋蔵文化財も博物館も通例は教育委員会の所管ですので、教育学部でということでしょうか。そうしたこともあり考古学研究室所属の学生さんには、方法論や学史の勉学に加え、発掘現場での実務経験も積めるように配慮してきたところです。学生さんたちの努力もあり、大学院修了者の多くは東北各地の教育委員会・博物館に専門職として就職し、研究者としても活躍をしています。学部卒では専門職としての就職はなかなか難しいものの、公務員として就職したのち、異動により文化財を担当している卒業生もいます。こうした点では、私を採用した大学側の目的をある程度は果たすことができたと思っています。

研究室の学生さんたちには、科学研究費などの資金を得て実施している研究にも様々な協力をいただき、また他大学との調査でも活躍をしていただきました。東北北部における弥生時代の栽培食物の解明などは成果の一つです。他大学との宿泊を伴う調査や飲み会も楽しい思い出です。こうした研究成果は大学院生との共著論文や出版物で公表してきました。学生さんと土器の観察を一緒に行っている時に、学生さんが私に研究のヒントを与えてくれることもありました。感謝・感謝です。研究室所属のすべての学生さんが専門職を目指すわけではありませんので、こうした勉学や研究を通じて「歴史意識」を醸成していただくことも、大きな目的にしてみました。各地・各分野で活躍をされている考古学研究室の卒業生の皆様には、こうした意識を持ち続けていただきたいと思います。この

点は学校教育教員養成課程に移ってからも変わりません。

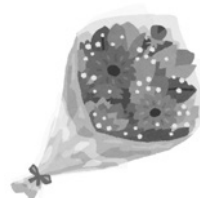
赴任して数年後からは教育学部のみならず、人文社会科学部ほかの全学の博物館学芸員養成も責任者として担当し、現在に至っています。主に夏季に各地の博物館で実施される実習には必ず立ち合います。学生さんの実習状況を確認するとともに、私とは異なる分野を専門とする学芸員の方々から、研究や学芸業務にかかわる様々なお話をうかがうのも楽しみでした。昨今では考古学以外の学生さんでも、学芸員として就職される方が増加しており、人文社会科学部の卒業生を中心に、東北各地の博物館で活躍をしています。

幸いなことに赴任以来一度も欠かすことなく、大学の固定の研究費以外の研究費（科研費ほか）を確保することができました。その資金により弥生時代の交易・流通研究、弥生土器の機能・用途研究を推進することができ、いくつもの著作を公表してきました。

14年間、楽しく研究・教育活動を行うことができました。関係する皆様には厚く感謝しています。

一方、小・中学校の教員になった考古学研究室の卒業生は6名のみです。すべて学校教育教員養成課程の卒業生です。

拙い文章を書かせていただきました。卒業生の皆様それぞれの分野でのご活躍を祈念しています。



語り尽くせぬ物語、出会えた皆様に感謝

保健体育科

鎌田 安久



固い絆に思いを寄せて・・・あれからどれくらいたったのだろう、40年の日々！人生の中でこれだけ同じ場所に住んだことは岩手が初めてでした。幼少時代、親の仕事の都合で日本全国北海道から九州まで1年半前後で引っ越しを繰り返し、転校した小学校はなんと5校、中学校2校（危なく3校に・・・）でした。転校生の中の転校生！そんな小中学生の頃、いじめにも関わらずに楽しく学べ、遊べたのも今思えばいつもそばで支えてくれた「学校の先生方」がいたからでしょう。「老師非常感謝」

大学教員への夢と希望を胸に40年前、大学院を修了後岩手に就職することを母国薩摩の親族に告げると、当時（岩手は日本のチベットと呼ばれていた？）はそんな地の果てに行くのかと、たいそう驚かれ心配され反対されました。吉幾三の歌も拍車をかけました（♪オラこんな村イヤだ（^^♪）。折しも赴任した年の6月には大宮―盛岡間に東北新幹線が開通しました。しかし関東遠征時、格安の東京ミニ周遊券が使える夜行急行【東北本線「八甲田」・常磐線「十和田」】が廃止されるまで新幹線乗車はありませんでした。終着「♪ああ上野駅」

助手として赴任した保体科の学生は常に活力にあふれ、学内でも異彩を放っていました。おのずとこちらにもパワーをもらい生気がみなぎり、講義に実習に研究にそして課外活動のサッカーにとエネルギッシュに活動したことが思い出されます。そしてこの40年間の教員生活を全力で活動できたのも同じ大学の同期で1年ずれて同じ保体科に赴任してきた戦友の栗林先生の存

在が大きくとても感謝しています。思い起こせば赴任当時は、年配の先生方から太郎・次郎と呼ばれ（学生からはカマ！クリ！！）、プール実習・釜石臨海実習での遠泳や花巻の野外活動、県営でのスケート実習、網張・安比でのスキー実習等々数ある実習で、先ず随より始めよと二人で先頭を切って学生と活動してきました。実習終了後帰還して、上田通りで学生と飲み会をするのが至福のひと時でした。特に遠泳・臨海実習では、40年前から釜石鵜住居の「宝来館」の皆様には、「未来を背負う先生たちになる学生さんたちだから」と、物心両面で大変お世話になりました。ここは2011年の東日本大震災で大きな被害を受け、女将も津波にのみ込まれながらも九死に一生を得て生還し、復興困難な中、必死に地域とともにスポーツ（ラグビー）や音楽（佐渡裕氏）を中心に復興を成し遂げようと努力されている姿は、いつまでも応援せずにはいられません。長きにわたり苦楽を共にした栗林先生は、大学改革のために平成28年人文学部の人間文化課程スポーツ科学専修担当へと学内移動されており、今年度同時期に定年退職となります。

ある時は運動場の整備のおじさん、またある時は小学校の校長先生、そしてまたある時は謎の外国人サッカーコーチ。遠い昔、小学校（甲Ⅱ）体育実技の時間に音楽を流しながらサッカーダンスや大腿部でボールリフティングをしたことや、新入生対象の「基礎（初期）ゼミ」で出会った皆さんがカマーチョと「Adventure」のアクティビティーをしながら最後は旧岩手山青年の家まで移動し野外活動・キャンプファイアーを体験したこと等々を通して、「体育」には知・徳・体のすべてをセットで育成できるストロングポイントがあることを、思い出していただければ幸いです。

若い時に旅をせねば物語を語れない。老いてもなお旅をすれば新たな発見があるのではと、これからは母国に戻って旅を続けたいと考えています。みちのく岩手の旅で出会えた皆様、大変お世話になりありがとうございました。

日本・アジアから世界へ耳と目と心を開く —私のミュージック・ヒストリー—

音楽教育科

川 口 明 子

1957年生まれの私は、高度経済成長期のごく一般的なサラリーマン家庭で育ちました。幼少期は童謡が好きで、小学生になるとピアノを習い始めました。当時のお稽古事は今と違って種類も少なく、そろばん塾とお習字位。そして、中産階級の台頭と共にピアノを買って子どもに習わせることがステイタス・シンボルとなり、楽器産業の振興と相まって、日本のピアノ生産台数は世界一を誇った時代でした。

そんな中、趣味で習い始めたピアノでしたが、ピアノの先生から「音大のピアノ科をめざしては？」と薦められ、迷いつつも中学時代はその専門教育を受けることになりました。当時の日本のピアノ教育は、今思い返しても「家元制度的な修行主義」の色が濃く、クラシック至上主義と相まって「他を犠牲にしても、毎日何時間も練習せよ。」という厳しいものでした。私は、「巨人の星」や「あしたのジョー」等のスポーツ根性マンガ世代なので、今ではそれを「スポ根ピアノ」と呼んでいます。

というわけで、高校から音楽科に行く予定だったのですが、ピアノ教育界の独特の世界に疑問を感じ、結局、都立の普通高校に進学しました。高校時代は、ピアノは一応続けていましたが、大学進学の際に「理系に行くか、音楽を続けるか」で大いに迷い、結局、お茶大音楽科に進みました。そこで恩師、徳丸吉彦先生に出会い、音楽には学問としての音楽学、その中でも世界の音楽を研究対象とする民族音楽学という分野があると知り、目を開かれました。

さらに阪大大学院に進み、インドネシアのガムラン音楽に出会いました。「世界にはドレミで表せない音楽もあるんだ！」という衝撃とともに、その不思議な魅力にはまりました。そして、ここでも恩師の谷村晁先生と山口修先生、そして個性溢れる先輩や後輩に出会い、知的シャワーを存分に浴びせてもらえる学恩に

恵まれました。そのおかげで、インドネシア（特に西ジャワのスンダ人）の音楽の研究と演奏は、私のライフ・ワークとなりました。1980年代当時は、記号論が流行し、文化相対主義が叫ばれ、音楽業界でも「ワールドミュージック」ブームが沸き起こった時代でした。

大学院修了後は東京都立高校の音楽教諭になり、高校生が好む様々なジャンルに耳を傾け、ヒットソングも耳コピしつつ、西洋音楽だけでなく、日本の伝統音楽やガムランなどの世界の音楽文化も勉強し続けるというミュージック・ライフが日常となりました。

また、教員生活の傍ら、仲間と共にスンダ音楽のグループ「パラグナ」を結成し、演奏活動も行ってきました。夏休み等にインドネシアに時々赴き、現地の音楽家に教を請いながら交流を続けてきたおかげで、私の耳と目と心は世界へと開かれたと感じています。

岩大には2007年後期に着任し、新たに小・中学校の先生方や児童・生徒の皆さんから、教育実習や共同研究を通して多くを学ばせて頂きました。幼児教育についても、附属幼稚園園長時代に「遊び」の奥深さを学ぶ機会を頂きました。「人間は遊ぶ存在である」とするホイジンガの「ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）」の世界を、目の当たりに体感した思い出があります。

また、『さんさ踊り』をはじめとする多種多様な素晴らしい民俗芸能（郷土芸能）が岩手には花開いていることを知りました。多くの学校で地元の民俗芸能に取り組んでおり、岩大でも毎年夏には『盛岡さんさ踊り』の練習が繰り広げられます。これが「当たり前」であることは、実は他の地域にはないとても豊かな音楽文化のあり方だと思います。そんな素敵な岩手の地で教員養成に携わってこられたことに、深く感謝しています。

卒業生の皆さんの今後のご活躍をお祈りしています。



[新会長就任]



ご挨拶

北桐会会長 藁谷 収

昭和51年、旧特設美術科（特別教科教員養成課程美術）を卒業いたしました藁谷収と申します。この度、北桐会の会長を仰せつかり、前小笠原会長の後を引き継ぎ、2年間の任期を務めさせていただきます。どうぞ宜しくお願いいたします。まずは、前会長のこれまでのご尽力に心より感謝を申し上げたいと思います。

同窓会は、大学・学部への支援と同窓生間の親睦、加えて後輩への後援などが主な目的で、会則を基に活動を行うことと考えています。そのためには多くの会員の皆様のお力添えが不可欠です。本部を中心に交流の輪を広げてまいりますので宜しくお願いいたします。歴代の会長が進めて参りました支部活動の充実、当会におきましても重要な課題で、県内支部だけでなく、他県への働きかけも必要で、地域別の支部設立希望の声も届いてい

ます。今後、地域別の支部ばかりではなく、職場や他学部の同窓会との連携も視野に入れた検討の必要性も出てくる様に感じています。

私は、長い間当会の常任理事会総務を担当してまいりましたが、現在の同窓会運営がこれほど難しい環境にあることは、今まで経験したことがないと思っております。

特に今年度は、個人情報保護法との関わりにより、名簿発刊事業の中止・終了を決定いたしました。同窓会としては困惑する出来事でありました。会員間の交流が途絶えることが無いように、事務局の役割も検討しなければと思っております。なお、新会員情報については、岩手大学が窓口となり、卒業生より提供いただくという方法が岩手大学より示されています。

迎える令和5年度は北桐会設立70周年記念事業を計画しています。コロナ禍の中、どのような事業にするか検討が始まっています。本部常任理事会に加えて盛岡支部の皆さんにも参加いただき実行委員会を組織し、記念式典等を計画してまいります。

早くコロナ感染症が収束し、今までの通り同窓会が盛んに交流の場になることを願ってやみません。今後とも北桐会をどうぞ宜しくお願いいたします。

末筆ではありますが、紙面の都合上ご挨拶が巻末になりましたこととお詫び申し上げます。

[会務報告]

3年目となるコロナ禍ですが、ウィズコロナへと変わりつつあります。対面での開催を控えてきた北桐会理事会も、12月2日に北桐ホールで開催できました。

また、臨時の役員会を開催し、個人情報保護法に則った名簿管理方法について協議のうえ、名簿発刊の中止を決定しました。

以下、今年度6月からの主な活動について時系列で報告いたします。

令和4年

- 6月2日 令和4年度第1回理事会を開催（書面）
- 6月30日 第63回評議員会を開催（書面）
- 7月7日 小笠原前会長退任
- 7月8日 藁谷新会長就任
- 7月25日 第1回常任理事会を開催
- 9月26日 第2回常任理事会を開催
- 9月30日 臨時理事会を開催（書面表決）
- 10月28日 臨時評議員会を開催（書面表決）
- 11月21日 第3回常任理事会を開催
- 12月2日 第2回理事会を開催（対面）

[連絡とお願い]

- 会長挨拶でも触れさせていただいた個人情報取り扱いについては、現在も引き続き、事務局・役員会により場面ごとの利用方法について検討中です。そのため、本誌『北桐』62号においても昨年までとは異なる箇所がありますことのお知らせいたします。
- 会員の住所変更・改姓等の際には、同封の葉書を利用して事務局へご連絡ください。
- 恩師や会員のご逝去の際には弔電をお届けします。もし情報が入りましたらできるだけ速やかに事務局までご連絡ください。
- 新たに支部設立を希望する地域がございましたら、本部までお問い合わせください。
- 発行協力費がたくさん寄せられています。ご協力いただきました会員の皆さまに厚く感謝を申し上げますとともに、引き続きご協力の程お願いいたします。
- 岩手大学同窓会連合会報も同封いたしますので、ご覧ください。
- 岩手大学教育学部教員養成基金への寄附のお願いについて同封しました。ご支援をお願いいたします。
- 同窓会活動へのご意見ご提案をお待ちしています。

編集後記

おかげさまで、「北桐」62号が完成し、会員の皆様にお届けすることができます。お忙しい中、快くご執筆・ご協力いただいた方々に、誌上より厚く御礼申し上げます。

今回の特集は「令和」における教育の「不易」と「流行」と題し、これからを生きる児童・生徒の可能性を引き出す学びの在り様について、ご寄稿いただきました。

この不易と流行は、今までも使われてきた言葉ですが、令和における独自性は、不易と流行が二項対立するものではなく、どちらもバランスよくお互いを補完する関わりの中で、子供の学びを構築していこうとするところにあります。本号では、このことについてたくさんの実践が紹介されております。ぜひ、ご参考いただければと存じます。

「北桐」は今後も、皆様のご協力を支えに、誌面の充実に尽くして参りたいと思います。なお、会員の皆様にご協力いただいた発行・発送協力費は、発送経費の一部に充当させていただいております。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。

最後に、会員の皆様のますますのご健康とご活躍を、編集委員一同お祈りし、編集後記といたします。

(J)

北 桐 第62号

令和5年3月14日発行

発 行 岩手大学教育学部同窓会「北桐会」
会長 藁谷 収
〒020-8550 盛岡市上田三丁目18-33
TEL 019-621-6618
<http://www.edu.iwate-u.ac.jp/hokutou/>
hokutou@iwate-u.ac.jp

編 集 北桐編集委員会
委員長 菅原 純也

印 刷 杜陵高速印刷株式会社
〒020-0811 盛岡市川目町23番2号
TEL 019-651-2110
FAX 019-654-1084

